



遺言を書く



仏教とはお釈迦様が私たちに教えて下さったおしえ。仏法とはお釈迦さまが「これがもの真真理」としめしてくださいました道理です。それを具体的に要約したのが昔から言う「三法印（さんぼういん）」です。仏法はつづめて言えばこういうことに目覚めることと教えているのです、言わば三つの旗印・看板のようなものです。

一、諸語行無常

二、諸語法無我

三、涅槃般寂靜

「諸行」とは、もろもろの造られたもの、すべての存在するものはという意味。

因縁生起といって無数の要因が、無限の関連を結んで仮に成り立っているほんのつかの間のもの。成立条件が崩れれば瞬く間にかなく消える、そんな存在に過ぎない。だからいまあるものを頼りにするではない。今ある姿を誇るではない。

仏教が日本にわたってきた頃は、政治も経済も混乱。人々の暮らしは時々刻々に盛衰を繰り返し、人のいのちの空しさ・はかなさを日々の暮らしのうえで実感させられていた。

だから仏教の「諸行無常」のおしえは生活実感としてだれにも理解できた。これが仏教のおしえとだれもが容易に理解した。

「色は匂へど散り（塵）ぬるを　わが世たれぞ常ならむ」（こきみた）。

「行く川の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは且つ消え且つむすびて久しく停まりたためしなし」（方丈記）

「祇園精舎の鐘のうえ　諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色　生者必衰のことわりを著す」（平家物語）など、仏教は世のはかなさ・わびしさをしのぐための教えという理解をなり立たしてしまったのです。末長く仏教は人の死・葬儀などを中心的な儀礼仏教になつていったのです。

二の諸語法無我。

この場合、「法」というのは「有為法」といって「ものがら」という意味で、今風に言うと「ものの個性」とか「主体」を指します。

（ガタピシ）。比較し対立、競争、差別、闘争を繰り返すのはそれぞれが「われ（よし）」

（我へのとらわれ）（我執）が原因であり、無明と渴愛（相手のことはみえないで、自分の都合だけで考え動く）こそがこの世の煩惱の根本原因と指摘するのです。

まず自分に目を向けましょう。この煩惱に充ちた世を生きる私が救われる道はと求めて行つた親鸞・道元の鎌倉時代になつてはじめます。

日本にも眞実の仏教が開かれて行つたのであります。この煩惱に充ちた世を生きる私が救われる道はと求めて行つた親鸞・道元の鎌倉時代になつてはじめます。

三、「涅槃般寂靜」

道元様は「仏道を習う」というは自己を習うなり。自己を習うというは、自己を忘るなり。自己を忘るというは、（心身脱落）。万法に

証せられるなり（今生きている証しを得させていただきますよ）」

仏教の究極の悟りですから簡単に到達できるものではありません。わたしたちの「しばで論証も出来ません。親鸞さまは「これを自然法爾」（じねんほうに）。と言いました。「おのずからしからしむる」。愚かな小賢しい自力の迷心をして素直に如来様のおはたらき（他力）にめざめましょう。

「万法に証せられる」わたし。「自然にしからしめられてある」わたしにあうための具體的な提案です。

『遺言』を書いて見ましょ。

財産分与や形見分けのためではありません。生まれ出たそのときから、今日にいたるまでの生い立ち。忘れてしまったのです。末長く仏教は人の死・葬儀などを中心的な儀礼仏教になりました。自然に法爾として「如來から呼びつけられていたいのちを垣間見ることがで

きるよう思います。七十歳すぎ八十歳にもなつたら遺言を試みた私。「自然に法爾として」如何から呼びつけられたいのちを垣間見ることがで

ます。生まれ出たそのときから、今日にいたるまでの生い立ち。忘れてしまったのです。末長く仏教は人の死・葬儀などを中心的な儀礼仏教になりました。自然に法爾として「如來から呼びつけられていたいのちを垣間見ることがで

三月	勝林寺	予定
二日(水)	清水正和宅	三回観
六日(日)	永井五生	一周忌
二〇日(日)	湯口 博宅	三回観
二一日(月)	彼岸会	午後二時より
二六日(土)	成田忠三	一周忌
二六日(土)	出石組	組内会
二六日(土)	みのりを聞く会	
二七日(日)	湯口美行宅	三回観
二八日(月)	出石組仏社総会	

合同役員会

二六日(土)	成田忠三	一周忌
二六日(土)	出石組	組内会
二六日(土)	みのりを聞く会	
二七日(日)	湯口美行宅	三回観
二八日(月)	出石組仏社総会	

二六日(土)	成田忠三	一周忌
二六日(土)	出石組	組内会
二六日(土)	みのりを聞く会	
二七日(日)	湯口美行宅	三回観
二八日(月)	出石組仏社総会	

二六日(土)	成田忠三	一周忌
二六日(土)	出石組	組内会
二六日(土)	みのりを聞く会	
二七日(日)	湯口美行宅	三回観
二八日(月)	出石組仏社総会	

葬儀 儀式

一月二十七日

三月一日

八十七歳

保谷



おねえちゃんの白蛇

わたしたち人間というは何と「我が身勝手」な生き物なのでしょうか。

私が身に不利なこと・都合の悪いことには目をつぶり、自分に都合のよいものだけを取り入れて兎に角「安泰な道」を歩もうとします。

早い話が、両親を始とするご祖先。三十代遡るとその数なんと二十四億人の数になると言います。そのうちの一人が欠けても今の私はない。一人一人みんな大切なご祖先です。その二四億のご祖先様のなかにはいろんな方がいたはずです。身分の高い高貴なお方もいた反面、極悪非道な悪人だつていたに違いありません。ところが殊に日本人は、家柄・血統を好みます。「わたしの家は天皇家の末裔で」とか「わたしは源氏の子孫」。そういうところでいわゆる「祖先崇拜」をしている訳です。

自分の都合、自分の利益、自己本位、利己主義。そして、全体の眞実を見ようとしているのです。我が身わが立場に執着してことの眞実が見えなくなっている状態。これを仏教では「無明（むみょう）」と渴愛（かつあい）」と呼び、「迷いの根本原因」「根本煩惱」などと指摘しています。

お正信偈（源信僧都の段）に

煩惱障眼雖不見 大悲無倦常照我

（自分がわいやの煩惱に目がくらんでいるわたしの目には見えなくとも、如來の慈悲のはたらきは、寸時の休みなくその私の身を照らしていくください）

いやな事には目をつぶりたい。不幸なことは忘れてしまいたい、汚いこと悪い思い出は早く忘れ消してしまいたい。

しかし不幸な嫌な思い出のなかに、實は大事な、忘れてはいけない眞実のあることを、老いて死を目の前にして、彷彿と思い浮かんでくる。忘れていた大切なご恩の数々。

父が死に、わたし自身眼病を患い、小学校二年で休学して、福知山の叔父伯母のところに預けられて過ごした一年あまりの月日。その間に母も死んでしまった。弟も亡くなつた。その暗い不幸な時のなかに命をかけて人の世の厳しい現実を教えてくれた一人の女性を思い出す。

叔父と叔母が住んでいた処は、福知山市街地から四キロほど離れた往還から少し登った山の中腹の小さな山寺であった。叔父の叔母にあたる人の縁でそこの住職をしていた。わたしはその寺に約二年世話をなつていていた。

そこから毎日叔父や叔母に連れられて福知山の竹内眼科まで通院する毎日。帰つてからも術後の治療に専念した。勿論遊び友達など一人もいない。

寺への登り口に小さなあばら家が一軒。そ

こに学校を出たばかりの女の子、「おねえちゃん」と呼んでいた人だけが私を遊んでくれた。世の中への怒りを、幼いわたしも感じたことだつた。

死んだねえちゃんは死んでしまった。

蛇の血をひいているといわれた若い娘の悲惨。血筋家柄などという差別が横行すること指摘しています。

な人で寺の裏山の竹藪から鳥餅で小鳥をつかまえ、鳥籠をつくって本堂の軒先に飼つてくれたり、県道の向こうに拡がる野原を横切つて、向こうの大川に駆けて行き、バケツに大小の川魚を掬つて運つて来る。その早業たるやまさに「くのー」そのものであった。その人に遊んでもらえる日が私も生き返つたような気持ちになる一日だった。

私の側に隣り村の婆さんがよつてきてこんなところがある日、一人でうすくまつている

ことを囁いた。「あんたよく福知山へあの娘におんぶされて行きなさるが。あの娘の背中は蛇のよう冷たくはないかえ」。それどころかその姉ちゃんのオンブが大好きで帰り道背中で寝てしまつことであつた。それがなんで蛇の背中？。不審におもうより私は腹がたつた。

寺の煙に黄色でウブ毛のある小粒なトマトがなつて、それを叔母といつしょに籠に採つていた、だから秋の夕方のことであつた。村の人々がなにやら叫んで、裏山の汽車のトンネル口の方に駆けつて行つた。飛び込み自殺。それがあの「くのー姉さん」であった。

トンネルの入り口の壁に、その人の片手が、あとから村人から聞いた話。

死んだねえちゃんは何も言わない。周囲のひとも口をつぐんで何も話してはくれない。おねえちゃんと一緒に暮らしていたおばあちゃんもそのみすばらしい家もいつのまにか亡くなつてしまつていて。何もかも消えていたけれど、わたしのここには言うに言われぬ怒りが残つた。

死んだねえちゃんは死んでしまった。

蛇の血をひいているといわれた若い娘の悲惨。血筋家柄などという差別が横行することだつた。

他人ごとではない。人間のこころのなかに

ひそむあの「差別のこころ」を、わたしは今にいたるまで恥ながら生きてきたように思う。孔子さまもよほど嫌悪あらわにいらだつたことば。

『論語』（学而篇）の有名なことは、温厚な

言葉を巧みに（巧言）表情たっぷり（令色）人に取り入ろうとする奴は、「誠意・愛情」のかけらもない奴！。

そんな人あなたの回りにいませんか。

「めだちたがりや」。上司にとり入ることの名手。かげで存分にサボる奴。



羹（あつもの）に懲（こ）りて

膾（なます）を吹く

羹は肉と野菜がはいった熱い吸い物。膾は大根の細切りを酢であえた酢の物。

あついお汁を一気にすすつて口のなか大やけど！。これに懲り懲り。なんでも食べ物は吹いて冷やしてから頂かないと、また失敗してはと、つめたい細切り大根の酢の物をフウフウ吹き吹き食べたとサ。用心深いにも程があります。でも大災害などに逢えば人間膾病になるのは当然かも知れません。

巧言令色

鮮（すくな）し仁

『論語』（学而篇）の有名なことは、温厚な孔子さまもよほど嫌悪あらわにいらだつたことば。

言葉を巧みに（巧言）表情たっぷり（令色）人に取り入ろうとする奴は、「誠意・愛情」のかけらもない奴！。

そんな人あなたの回りにいませんか。

「めだちたがりや」。上司にとり入ることの名手。かげで存分にサボる奴。